

平山亮、佐藤文香、兼子歩編（勁草書房、2024年）

男性学基本論文集

川口 遼*

本書は、英語圏の男性性に関する基本論文を編んだものだ。本書の構成は、男性性概念に関する議論動向をレビューする巻頭言の後に、「I ミクロな社会分析としての男性性」、「II マクロな社会分析としての男性性」、「III 軍隊・戦争研究のなかの男性性」、「IV 歴史学のなかの男性性」が続くものとなっている。

まず、平山亮による巻頭言「男性性役割の社会化から、男性性による不平等の正当化へ」は、冒頭に示した本書の性格を示すマニフェスト的な役割を果たすとともに、収録された論文が書かれた学術的背景を読者と共有する役割を担っている。具体的には、「男性『かくあるべし』という男性性役割ではないものとしての男性性概念とその意義」（16頁）について、「ヘゲモニックな男性性」概念が、時に多様な用いられ方をしながらも、男性性が性の不平等を正当化する働きをすることに焦点を当てることで、ジェンダー研究に貢献してきたことが確認される。

続いて、Iでは解説「『男をつくりあげる実践』から、性の不平等を腑分けする」とともに、「1 男性、男性性、そして援助要請の文脈」、「2 ハイブリッドな男性性——男たちと複数の男性性に関する社会学の新しい方向性」、「3 ヤワなペニスを硬くして——高齢男性の生活に見られる年齢・階級・ジェンダーという社会関係」が訳出されている。1は、一般によく知られている「問題に直面した男性が支援を求めない傾向」について、その傾向が既存の男性規範や役割の社会化によって一定程度影響を受けていることを認めつつ、それでも生まれる男性個人間および男性個人内の多様性を指摘し、男性性の社会心理学が性役割の社会化と男性性の社会構築の両方に注目することを促している。2は、女性的とされてきた要素を取り込む形での男性の言動、外見、価値観等の変化を「ハイブリッ

ドな男性性」として概念化する研究群をレビューするものである。そこではこの研究群が、表面上の男性性の変化を、権力と不平等のシステムそれ自体の変容というよりも、その正当化の方法の変容と解釈してきたことが確認される。3は、男性性研究においては、若年男性の経験に重きを置く傾向をエイジズムと批判しつつ、高齢男性に関する研究には、男性たちがいわゆる「理想の男らしさ」をどれだけ懸命に追求しているのかや、男らしさの再定義をどのように始めるのか、といったことを明らかにする可能性があることを、「サクセスフル・エイジング」（84頁）を称揚する広告等の分析を通じて示している。

IIでは、冒頭の解説において、まず日本における男性性をめぐる研究史の特徴として「唯物論との関係の『希薄さ』」（113頁）をあげつつ、グローバルな資本主義の展開と男性性の変容の関係を視野に収めるという趣旨が示された上で、「4 新自由主義的メリトクラシーにおける白人労働者階級の少年たち——『アスピレーション向上』アジェンダの落とし穴」、「5 グローバルな文脈における男性の実践とジェンダー関係を研究する」、「6『ヘゲモニックな男性性』から『男性のヘゲモニー』へ」が訳出されている。4は、若者、特に若年男性の学校から職場への移行の失敗が問題となる中、彼らのアスピレーションを掻き立てることによって対応しようとするイギリス政府のとり政策が、結果として「真の原因である経済的、社会的、文化的資本の不平等な配分という問題を覆い隠してしまう」（123頁）ことを論じるものである。5は、グローバル化と男性性の変容をテーマに、男性の暴力、男性の家庭内での実践、男性の健康等について国境を越えた分析を行う書籍の序論の訳であり、エスピン＝アンデルセンらの議論および女性の経験に対してトランスナショナルなアプローチ

* 東京都立大学人文科学研究科客員研究員

を取る研究群を念頭に、男性性研究における比較社会分析の可能性を提案している。6は、この分野の最重要概念である「ヘゲモニックな男性性」概念に、どうしても特定の男性集団の特性や「理想の男らしさ」といった理解がまとわりつくことを嫌い、代わりに「男性という社会的カテゴリーへの権力の付与およびそれに対する同意調達がなされている状態『男性のヘゲモニー』」(118頁海妻による解説におけるまとめ)の利用を訴えるものである。

IIIでは、軍事的／軍事化された男性性概念を用いるフェミニスト国際関係論や軍事社会学などの研究動向を抑える解説の後、「7 防衛専門家たちの合理的な世界におけるセックスと死」、「8 ヴェールに隠された参照項——九・一一後アフガニスタン攻撃に関するブッシュ政権の言説におけるジェンダー構築」、「9 国際関係における軍事化された男性性」が訳出されている。7は、「精神の軍事化のメカニズム」(225頁)——例えば「安全に使用できないような種類と数の兵器を保有すること」(201頁)といった非合理の合理化が、深くジェンダー化された「彼ら(引用者注：防衛専門家たち)の使う言語を学び、彼らの情報や議論になじむ」(202頁)なかで果たされていくことを、防衛専門家たちのコミュニティに参加する機会を得た筆者自身の経験をもとに論じるものだ。8では、2001年のアメリカによるアフガニスタン攻撃が少女と女性を「テロリスト」から守るというレトリックによって正当化されたことを例に、「『ネーション』および『敵』の支配的な言説的構築が、ジェンダーに関する既存の文化的語りを参照することを通して(再)生産されている」(251頁)ことが論じられる。9では、関連する議論をレビューしながら、フェミニストらによる暴力を終わらせようとするプロジェクトにとって「軍隊の内部とその外部における男性性の構築に焦点をあてた二重の戦略」(265頁)、すなわち「軍隊その他の軍事的制度内部における軍事化された男性性の再構築の試みを支援すると共に、より広い社会における男性性を脱軍事化する方法を探る」(265頁)ことの重要

性が主張される。

IVでは、男性史あるいは男性性の歴史学的研究の研究史を概観する解説ののちに、「10 男性性、身体化された男性労働者、そして歴史学者のまなざし」、「11 キリスト教的兄弟愛、あるいは変態性欲? ——第一次世界大戦期の同性愛アイデンティティと性的境界の構築」、「12 ジェンダーと帝国主義——一九世紀末ベンガルにおける植民地政策と道徳的帝国主義のイデオロギー」が訳出される。10は、労働者階級のジェンダー史の「身体的展開」がもっぱら女性のセクシュアリティ、外見等への注目として果たされることによって、「労働者階級史はますます職場における男性の身体存在を自然化し、職場においては女性の身体は場違いだという考えを強めてしまう」(302頁)ことを懸念し、男性性についての歴史研究において「労働する身体」へ注目する必要性を主張する。11は、第一次世界大戦期のアメリカでの裁判——海軍による「変態性欲者」に対する捜査が地元の牧師と若い水兵の性的関係を明らかにしたというもの——を取り上げ、関係者が「事件」の評価を争う中で展開した、「性的なもの」と「性的でないもの」の線引きをめぐる文化的闘争を描き出す。12は、イギリスによるベンガル地方の植民地支配に関する言説の分析を通じて、帝国主義的な対外支配が「男らしさの理想」に関する一連の概念を通じて正当化していく様を描き出すものだ。

以上のように本書においては「男性性はどのようにつくりあげられるのか」との視点のもと、対象、方法ともに多様な論文が収録されている。巻頭言および各部冒頭の解説が収録論文のみならず関連分野の良質なレビューとなっており、研究動向および当該分野における今後の課題の把握の観点からも得るものが多い。例えばIの解説にて、男性のあり方の「表面的な変化を過大評価してしまうことこそが、不平等な社会関係の維持に加担することになる」(33頁)懸念を指摘しつつ、「構造の変動を安易に語らないことは、むしろ希望」(33頁)であると主張されるが、男性性研究が論じていくべき重要な論点だと思われる。